ディボーションノート　１３

|  |
| --- |
| 　３月３０日(月曜)　列王上　第２０章　　エリヤ(名前の意味は「主は神である」エリー・ヤッハ)は預言者として召され、20年間、偶像礼拝を続けるアハブ王と戦いました。旱魃の裁きを告げ、ケリテ川に逃げてカラスに養われ、ザレパテに逃げてやもめに養われ、バアルの預言者400人と対決して勝利し、怒っイゼベル女王の手を逃れてシナイ半島のホレブまで行き、そこで静かな細い御声を神から聞いて立ち直ります。北王国イスラエルを恐れさせたのは隣国の「スリア」(シリア)です。アハブ王(前874－852年)は強引な要求に対して、シリアのべネハダデとの戦いを始めます。ここでもアハブは神のご計画を自分勝手に曲げたことを、預言者の象徴行動で示されます。 |
| ３月３１日(火曜)　 列王上　第２１章　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ナボテのブドウ畑を、冤罪(えんざい)によって奪い取った事件が起きました。アハブ王の妃のイゼベルの罠の恐ろしさよ。無罪のナボテを裁判で有罪にして石で撃ち殺す刑(石うちの刑)にして殺す。それから夫のアハブに「欲しかったブドウ畑を取りなさい」と平然という。神はエリヤを通じて、裁きの言葉を語られます。アバブはこの裁きの預言を聴いて悔い改めます。それを見られた神は預言の執行を遅らせてくださいました。 |
| ４月１日(水曜)　 列王上　第２２章　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　北王国イスラエルの王アハブは、南王国ユダの王ヨシャパテに、「共同して、ヨルダン川の東にあるラモテ・キレアデを隣国スリア(シリア)から取り戻す戦争をしよう。」と言います。そこでヨシャパテ王が、戦うべきかどうかを預言者たちに聞きますと、「戦いなさい、勝利します。」と言います。彼は不安になり、ミカヤが呼ばれてきます。ミカヤはいつもと違い、その時に限って、戦いなさい、と預言したのです。どうして同じ預言をするのかと問いただすと、実は神のご計画は、この戦いにアハブを誘い出し、殺すためだと話すのです。恐ろしくなったアハブは、よろいをヨシャパテ王と交換します。しかし全く何気なく放った矢が、鎧のわずかな隙間の間を射抜いて、アハブは死にます。 |
| ４月２日(木曜)　列王下　第１章　受難週の午前・午後の祈り会　聖餐式　北王国イスラエルの王アハブは戦死し、アハジヤが王となります。彼も父親同様に偶像礼拝を行い、蝿の神(バアル・ゼブブは新約聖書ではベルゼブルとして登場します)を信頼します。神はエリヤを通じて、まことの神を無視して神ではない偶像に信頼した者は必ず死ぬ、と宣言されます。アハジヤ王はエリヤを王宮に招こうとしますが、山の頂から下ろうとしません。最初の使者５０人が天からの火で焼かれ、２回目の50人も焼かれ、3回目の使者の代表がエリヤに「わたしたちの命をあなたの目に尊いものとみなしてください」と命乞いをします。そこでエリヤは山を降りて、アハジヤ王に直接に神の審判を語ります。その言葉の通りになっていきます。 |
| ４月３日(金曜)　 列王下　第２章　　エリヤは神のもとに召されます。その前にエリシャ(神は救いである)は、エリヤの後継者となることを切に望み、離れずに求め続けます。「霊の二つの分をください」とは、長男が2倍もらえる当時の相続の決まりのように、私を正式な後継者として預言者たちをまとめる霊の賜物を下さいとの願いです。これには、エリヤにもできることではなく、霊の賜物は神様から与えられるものですので、求めの切なる信仰によって、恵みとして与えられるものです。しかし、エリシャは確かに与えられました。次々と起される奇跡のわざに、エリシャの特徴を見せられます。　　　　　　　　　　 |
| ４月４日(土曜)　列王下　第３章　合同朝祷会(鳩山のぞみ教会)　北王国に新しい王ヨラムが即位します。東のモアブが、王様の交代を狙って反乱を起します。ヨラムは戦いにエリシャを招き、同行させます。これが勝利を引き寄せる鍵となります。戦いだからこそ神の御心を聞いて従う。忙しい毎日だからこそ、1週間の最初の礼拝を何ものにもまさる神の言葉を聞く礼拝として生きる。列王記の歴史は、神を神として礼拝し、従うことこそ、国と個人の基盤だと教えています。なぜなら、礼拝が崩れ、ささげる姿勢が崩れ、そして国と人生の全体が結果的に崩れることは、聖書の中に、また現代の信仰者の中に、見られることです。歴史の記述から、わたしたちの生き方を振り返りましょう。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 |